

米深層国家に共同で立ち向かうトランプ - プーチン

【訳者注】これは、トランプとプーチンの会見の様子を、直接目撃したわけではないとはいえ、よく捉えていると思う。二人の間に、このような心を開いた、信頼の空気が流れたのは、間違いないと思う。トランプは、このような（策士でない）本物の政治家に会ったことにはないはずである。このような独立不羈の、強い政治家にも会ったことがないであろう。このような信頼できる誠実な人間さえ、周囲にはいないはずである。

特に注目すべきは、トランプがこの会見の前日に、ポーランドで、反ロシア演説をやったという事実である。つまり彼は、アメリカ向けに悪役を演じてみせた。プーチンが何も言わないことを知っていた。果たしてプーチンは何も言わなかった。そんなことを咎めるような人物なら、最初から彼を尊敬などしないだろう。プーチンはアメリカの内情を見通しているから、前政権のときにも「アメリカの政治家は大変だ、難しい任務をよくやっている」というようことを言った。しかし万一、攻撃されれば直ちに反撃して、その場で壊滅させるとも言った。

彼らは“政治的”取引や、取り決めのようことは、何も話さなかったはずである。彼らの会談の内容は、（言葉に表したかどうかは別にして）ウソによって世界を動かすことはできないということ、何が世界の問題か、特に共通の敵は誰かということ、根源的な悪の問題などであったろう。この二人の chemistry（相性）のよさを指摘する記事もある。彼は今後も、悪行をやめはしないであろう。それと会談での確認とは別である。

Finian Cunningham

July 9, 2017, Information Clearing House



ドナルド・トランプとウラジミール・プーチンが、G20 サミットで、互いに心を開いて挨拶するのを見るのは、気持ちのいいことだった。彼らの画期的な最初の会見がなされた後は、この2人の指導者が、未来の協力のための個人的な基礎を、固めてほしいと人は願う。

G20 サミットが行われたハンブルグでの、後の記者会見で、ロシア大統領ウラジミール・プーチンは、ひどく荒れた米露関係を修復するチャンスはあると信じていると語った。彼はトランプのことを、思慮深く理性的だと褒めた。「テ

レビで見るトランプは、実物とは全く違っている」とプーチンは皮肉を言った。

<https://sputniknews.com/europe/201707081055364193-putin-presser-g20-hamburg/>

一方、ホワイトハウスは、この 2 人の指導者間の 2 時間の会談（もともと計画されていたより 4 倍も長い）は、大きな世界問題を共同で解決する、すばらしい出発点になったと歓迎する声明を発表した。https://sputniknews.com/radio_fault_lines/201707081055353119-trump-and-putin-go-into-overtime/

「どんな問題も解決されなかった。誰もこの会談で何かが解決するとは期待しなかった。しかしそれは、共同で解決すべく今から始まる、いくつかの難問のセットについての、対話の始まりだった」と、トランプのトップ国家安全保障アドバイザー HR McMaster は言った。

<https://sputniknews.com/politics/201707091055375960-trump-putin-meeting-g20/>

トランプは彼の振舞いによって褒められてよい。彼は対等の立場で、敬意をもってプーチンと面会した。「あなたにお目にかかれて光栄です」と、米大統領は握手の手を差し伸べながら言った。

この大いに待たれていた会見は、トランプがホワイトハウスに入って、ほとんど 7 か月後にやってきた。その期間中、アメリカのメディアの大半は、トランプはロシアの手先だと非難し、プーチンは昨年アメリカ選挙で、トランプに有利になるように干渉することを命じた、とする非情なキャンペーンを行った。

（深層国家に）忠実なニュース組織が際限もなく繰り返す、ほのめかしや、匿名の米情報局の主張のほかには、トランプのロシアとの癒着や、プーチンの認めたサイバー・ハッキングの証拠は、何一つない。トランプはこの主張を“フェイク・ニュース”として一蹴し、一方、モスクワは、この申し立てを根拠のないロシア憎悪だとして拒絶した。

<https://sputniknews.com/us/201707081055353272-trump-sanctions-senator-warner/>

この反ロシア・プロパガンダの毒を含んだ背景の中で、トランプ大統領は、この週末、プーチンに会った。この二人は、30 分の面談をする予定だった。ところが彼らの討論は 2 時間に及んだ。彼らは中でも特に、シリア、ウクライナ、北朝鮮などの喫緊の問題について、見解を交わしたと言われる。トランプは、ロシアの米選挙への干渉と言われるものを取り上げ、プーチンはアメリカの同役に対し、それはでっち上げの騒動で、ロシアは何の関係もないと、詳しく説明した。<https://sputniknews.com/world/201707081055355869-putin-trump-meeting-agreements/>

<https://sputniknews.com/analysis/201707081055354084-putin-trump-syria-ukraine/>

この会見のほんの数日前に、アメリカのメディアの論説家やお偉方は、トランプは、攻撃的な態度でプーチンに会うべきだと警告していた。主導的反ロシア・メディアの一つ、ワシントン・ポストは、あたかもこの主張が証明済みの事実であるかのように、“米選挙干渉”についてプーチンを叩けと強く忠告した。それはまた、大統領はプーチンに対し、ロシアはシリアの政権交代を認めねばならないと通告せよ、と強く求めた。それは脅迫に近いものだった。https://www.washingtonpost.com/opinions/what-trump-should-say-when-he-meets-putin-for-the-first-time/2017/07/02/5e1dc790-5dbd-11e7-a9f6-7c3296387341_story.html?utm_term=.28a05ea5519f&wpisrc=nl_headlines&wpmm=1

トランプの名誉とすべきことに、彼は、プーチンに対する態度の中に、米メディアのロシア憎悪の影響を全く見せなかった。彼は誠意と敬意にあふれ、いろいろな問題についてのロシアの見方を、心を開いて傾聴した。そのため両指導者は、協力して前進する合意をしたように見える。

そこで問題は、次はどうかということである。トランプとプーチンは、不当な遅れと毒のある背景にもかかわらず、明らかによいスタートを切った。しかし、モスクワとポジティブに関わろうとするトランプの意欲とは、現実的にどういうことを意味するのか？

ワシントンに軍事 - 情報機関との絆をもち、政治的なメディア機械をもつ米深層国家は、ロシアとの関係を正常化することを望んでいない。プーチン大統領の下で、強力な外国としてのロシアが独立しているということは、アメリカの地球的野心にとって、腹立たしいことである。それこそが、深層国家が、反ロシアでタカ派のヒラリー・クリントンを、選挙に勝たせたかった理由である。トランプの勝利が彼らの計算をひっくり返した。

大変なプレッシャーの下で、トランプは時には、ロシアへの敵意を示すことについて、アメリカの政治的体制に譲歩するよう見えた——ひそかなシリアでの戦争や、モスクワに対する新たな制裁に見られるように。

<https://sputniknews.com/politics/201707081055368902-putin-us-syria-position/>

ドイツでプーチンに会う前日、トランプはポーランドにいて、いろいろな話題の中でも、ロシアが“諸国を不安定化している”という内容の地方遊説演説をワルシャワで行った。米大統領はまた、ロシアは“西洋文明”を覆そうとしていると思う、とも言った。それは陳腐なロシア憎悪にすれすれの、挑発的スピーチであった。それは近くプーチンに会うという彼の予定にとって、好ましいものではなかった。衝突が待ち受けているように思えた——アメリカのメディアが楽しみに待っていたように。

しかし、翌日のプーチンとの会合は、驚いたことに心の響きあうものだった。そして話し合われた中身は、双方からの協力しようという純粋な希望だった。

両大統領がよい関係を結び、個人的にわかり合ったことはよいことである。にもかかわらず、その上にあまり大きな期待を積み上げないことが肝要である。

両リーダー間の建設的な会見の直後に、アメリカのメディアはロシア憎悪を再び始動し始めた。アメリカのメディアは、トランプに対する、またモスクワとの関係を正常化しようという彼のアジェンダに対する、深層国家の敵意の、捌け口になっている。

ニューヨーク・タイムズは、トランプの選挙運動が“クレムリンに繋がる”人々と接触していたという、もう一つの、まさかという話を報道している。CNNは、大統領がいかにプーチンの仕掛けた罠に落ちたかについて、見解論説を載せている。

<https://www.theguardian.com/us-news/2017/jul/09/trump-russia-new-meeting-revealed-involving-donald-jr-kushner-and-manafort>

<http://edition.cnn.com/2017/07/07/opinions/trump-fell-for-putins-trap-psaki/index.html>

こうした途方もない共謀物語が、ジャーナリズムとして通用するとは、耐え難いことである。そして、核保有大国の両代表の友好的な会見が、よい展開として受け入れられないとは、あきれ果てた話である。

しかしこれは、トランプが、アメリカの体制内部の、ロシアとの正常化を望まない強力な深層勢力に対して、一撃を食わせたことを示すものである。米深層国家は、その存続のために、対決、戦争、そして終わりのない軍国主義に頼っている。それはまた、アメリカの国際企業を主人として仰ぐ、従僕だけの住む世界を望んでいる。

独立したロシアとか中国といった強力な外国を、彼らは許すことができない。なぜなら、それは一極覇権主義というアメリカの野望を覆すからである。

トランプのプーチンとの邂逅が評価すべきだったのは、彼が、毒を含むロシア憎悪に屈することもなく、愚かで無思慮な、タフガイ的な姿勢を取ることもなかったことである。トランプはそれとは逆に、2人の人間がそうすべきように、誠実なやり方でプーチンに手を差し伸べた。米深層国家は、人間性とか理解し合うといったことには、関心がない。それは、他の人間をあからさまに支配することにしか関心がなく、誰でも邪魔者と見られた者は、最も残酷なやり方で処分される。

ジョン・F・ケネディ大統領が、深層国家によって、白昼、暗殺されたのは、彼がモスクワとの関係正常化や平和共存を、あえて求めようとしたからだった。深層国家は、モスクワとも、他の誰とでも、正常化や平和を求めてこなかったが、それは、戦争機械、すなわちアメリカ資本主義の維持に、あまりにも多くの儲け口がかかっていたからだった。

これは、トランプの暴力的な始末を予言するものではない。深層国家は他の方法をもっている——メディアの統制とか、他の汚い仕掛けなど。

トランプのロシアに対する友好的な近づきは、少なくとも希望の持てるしるしである。しかし、アメリカの権力構造と、その懲りることのない戦争好きを考えると、トランプが約束以上のことをすることを、許されるかどうか疑わしい。彼がそれを試みれば、暗黒勢力が邪魔をするだろうと予想できる。やらなければならないのは、民主的な反逆を通じて権力構造を変えることである。それが起こらない限り、ホワイトハウスのいかなる大統領も、深層国家の暗黒勢力の人質にすぎない。

——以上